

# 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化

後藤 淳子<sup>1)</sup>・廣岡 秀一<sup>2)</sup>

## The transition of gender related trait cognition and gender role attitude in university students

Junko GOTO and Shuichi HIROOKA

本研究は、1978年に作成されたMHF-scaleを約20年後の大学生に実施することによって現代の大学生の性役割に対する認知を検討し、加えて、約20年間における大学生の性役割態度の変化を検討しようとしたものである。

性役割特性語の認知構造を数量化Ⅲ類を用いて検討したところ、男性性、女性性を弁別する軸と、性的なもの、非性的なものを弁別する軸がみられた。また、各特性語を評価次元間の被選択率の差の検定によって、M、H、F項目のいずれと認知されているかを検討したところ、従来Masculinityとみなされていた「指導力のある」、「自己主張できる」、Femininityとされていた「言葉遣いの丁寧な」がHumanityに、Humanityとみなされていた「明るい」、「暖かい」、「率直な」がFemininityに移動した。これにより男女の役割が近づき、女性役割は以前よりも社会的に望ましいものへと変化したといえる。

大学生の性役割態度は20年前と大きな変化は見られなかった。ただし、女性役割期待の変化に伴い、女子は女性役割を以前よりは受容できるようになってきたと考えられるが、まだまだ周囲からの役割期待との狭間で役割葛藤に陥っている傾向がみられた。また、男性役割期待は女性役割期待に比べて強固なステレオタイプが保たれており、今後は男性も性役割との間で葛藤を感じる可能性が示唆された。

**Key words:** gender, gender related trait, gender role attitude

### I. 問題と目的

女性の社会進出とそれに伴う収入の増加に代表される男女の地位の接近により、「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性役割が崩れつつあるとはいえ、性別によって期待される役割が異なることは、誰もが日常生活においてしばしば感じることである。

男性と女性は生物学的な性によって区別されるだけでなく、男はどうあるべきか、女はどうあるべきかというそれぞれの社会や時代、文化の価値

観と密接に結びついた価値観が存在する。柏木(1967)が「性役割とは社会(文化)から性に応じて期待される一連のパーソナリティ特性、つまり、性に対する社会的役割期待である」と定義しているように、それぞれの性に応じた性役割をさまざまな場面において求められている。

心理学における性役割の研究は19世紀末の性差研究に始まり、パーソナリティ特性・行動・態度・興味など広範囲にわたる性差について実証的な研究がなされた。この頃の研究者の関心は男女差の存在を前提にして、性差が作られる要因が生

1) 三重大学大学院教育学研究科 e-mail: junko@schl.edu.mie-u.ac.jp

2) 三重大学教育学部 e-mail: shuhiro@edu.mie-u.ac.jp

物学的に規定されているのか、それとも文化的に規定されているのかという議論に関するものであった。

しかし、アメリカでの女性解放運動の影響を受けて、1970年代には画期的な心理学的研究成果がいくつか発表され、性差研究が大きく発展する原動力となった。伊藤（2000）によれば、伝統的な性役割ステレオタイプの存在と性の二重基準が女性に不必要な内的葛藤を生じさせていることが明らかにされ（Broverman et al., 1968, 1972）、男性性、女性性は対立する概念ではなく、個人が同時に併せ持つことが可能なアンドロジニーという概念が提出された（Bem, 1974, 1976）という。これらの研究をきっかけに、それまでの「（性別に沿った）適切な性役割を習得することが個人の適応を促す」という前提に疑問が呈されることとなり、発達理論の再検討が行われたわけである。また、「母子関係の理論」研究（Bowlby, 1969）以降、子どもの発達において「母」や「母性」を重視する傾向はことさら強調されてきたが、そうした「母性」概念が女性だけでなく、男性や子どもをも呪縛し、人間発達に関する多様な側面を見えにくくしてきた点も指摘された（中山, 1994）。このような流れの中で、性役割研究の中心的問題も子どもの性的社会化を扱う発達研究から女性の葛藤や平等主義的態度を問題とする社会心理学へと視点がシフトし、性役割研究は新たな段階に入った。1980年代に入ると、幅広い分野において性役割や性差の知識へのニーズが高まってきたために、性役割に関する学際的研究が増加し、比較文化研究も目立つようになってきた。

日本においても性役割研究が盛んになり、Bemのそれと同質の調査が伊藤（1978）によって行われた。日本の成人男女においても、男女に別々に期待されてきたMasculinity（男性性）、Femininity（女性性）だけでなく、両性にとって重要な性質であるHumanityとでも呼ぶべきものが存在し、その三者の関係はそれぞれを頂点とした正三角形で表せるという三角仮説が提唱され、男性役割は社会的望ましさと一致するが、女性役割は一致しないこと、女性の自己評価と周囲からの役割期待の間には大きなズレがあり、それが役割葛藤を生んでいることなどが明らかにされた。

性役割態度の構造を検討した研究をみると、中学生から大学生までの青年男女においては男性役割次元として活動性と知性の2因子が、女性役割

として美・従順の因子が存在し、女性は美・従順という特性を女性役割として認知することに消極的であり（柏木, 1972）、大学生男女においては男性の性役割は作動性と共同性の二次元より成り、女性のそれはこれに美・繊細さを加えた三次元よりなる構造をしていることが確認されていることがわかる（伊藤, 1986）。

日本における性役割研究では、性役割態度に大きな影響を及ぼすと考えられる、いくつかの変数がこれまでに確認されている。

①性別: 男性の性役割態度は女性より伝統主義的である（東, 1984; 鈴木, 1994）。

②教育レベル: 教育レベルが高いほど態度が平等主義的である（鈴木, 1994）。東・鈴木（1991）によると、本来平等主義的な人が高い教育を受けるのではなく、教育レベルが性役割態度の形成に影響することが確認された（Thornton et al., 1983）が、その因果関係を調べる研究はこれが唯一の調査であり、断言するのは多少危険を伴うという。

③年齢: 性役割態度は年齢が高くなるほど伝統主義的になる。

④女性の就労状況: 無職女性の性役割態度は有職女性より伝統主義的である（鈴木, 1994）。しかし、特に日本女性の性役割態度変数としては職の有無より職種やキャリア志向が有効なことが示唆されている（Suzuki, 1989）。

⑤夫の家事行動: 夫の家事行動は男性役割に対する態度がリベラルであるほど増加する（鈴木, 1994）。

⑥性役割観の発達の認知: 中学、高校と学年が進むにつれて性役割を識別的に捉えるようになり、特に大学生では性による役割期待の差異を強く意識している。女子はこのとき期待と自己のズレが最も大きくなり、役割葛藤が生じていることを予想させる（柏木, 1972、伊藤・秋津, 1983）。女子においては大学生になると役割観の傾向は高校生よりも極端になり、「二つの矛盾した女性の役割の存在」がみられるが、大学生と家庭婦人の間に転換点があり、母親になると高校生、大学生と極端になっていた傾向が緩和される（稲垣, 1969）。

このように、個人にとって性役割の獲得が大きな課題となるのは特に青年期においてであろう。「男性である自分」「女性である自分」という性役割に関する同一性は、個人の自己概念に深く関わっているものでもあるため、性役割という社会的な

価値観を取り入れながらいかに自己実現していくかという形でその課題は暗黙にも提示されていると考えられる。

Bem (1974) は男性性と女性性を兼ね備えた“psychological androgynous”が心理的に安寧で適応的であるとしたが、三井 (1989) によれば尺度構成や回答者のタイプ分けに関して問題点がいくつか指摘されており、その後の研究においても androgynous の方が他のタイプのものより心理的に安寧で適応的であるという一貫した結果は得られていない。Jones, Chernovetz & Hansson (1978) は Bem が主張するような特徴は androgynous とではなく、masculine と結びつくものであること、女性の場合には masculinity の特徴を多く有することがより望ましい適応状態をもたらすことを明らかにし、これは Taylor & Hall (1982) によっても確認されている。

日本においてもこれと同じく、自己実現的であるためには男性性を獲得しているか否かが重要であり、女性においても男性性の獲得は自我の安定・自己志向できることに大きく寄与していること、女性性の獲得だけでは精神的な健康には十分でない(遠藤・橋本, 1998) ことが報告されている。

また、日本における性役割態度の変遷を見ると、男性は外で働き、女性は家庭を守るものという伝統的な態度を持つ人は減少しているとはいうものの、まだ平等主義的態度を持つには至らず「擬似平等主義的—表面上やや平等主義的だが基本的には伝統主義的—態度の人が増加している」(東・鈴木, 1991) という指摘もあり、日本は現在平等主義への過渡期にあると考えることが可能である。

事実、1999 年には内閣府男女共同参画局が「女性も男性も互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別に関わらずその個性と能力を発揮することができる男女共同参画社会の実現は、21 世紀の我が国社会のあり方を決定する最重要課題の一つ」と位置付けた「男女共同参画基本法」を打ち出したことにより、ジェンダーフリーな社会を実現するための試みがこれまで以上に多くなされるようになったのはその一つの表れであろう。

性役割は社会のありかたに規定され、社会の変化を如実に映し出すものであると考えれば、我々の社会の将来的変化を予測する重要な手がかりになりうる。よって性役割は社会のあり方をみる上でも、個人のあり方をみる上でも重要なテーマであることに疑いの余地はない。

価値観やライフスタイルの多様化に伴い、これまでの伝統的な性役割という社会的規範が崩れ、これからのジェンダーフリーな社会に対応した、新たな社会的規範の構築が求められている。では、そのような時代を担い、これからの社会を創っていく主体となるべき青年は伝統的に持たれてきた性役割をどのように評価しているのだろうか。また、性役割を極端に識別的にとらえ、特に女子では自己評価と周囲からの役割期待との間で役割葛藤が起こっているとされるこの年代における性役割態度は社会状況の変化の下でどのように変化しているのだろうか。

以上の問題意識に基づき、本研究の目的を以下の 2 点に要約する。

1. 1978 年に作成された MHF-scale (伊藤) を用いて性役割特性語の認知的変化を把握する。
2. 大学生の性役割態度を測定し、約 20 年の間にどのように変化したのかを明らかにする。

## II. 方 法

### 1. 調査対象者

京都府の私立 R 大学生 261 名 (男子 136 名、女子 125 名)、三重県の国立 M 大学生 98 名 (男子 55 名、女子 43 名)。どちらも 4 年制、共学の総合大学である。対象者の平均年齢は R 大 20.37 歳、M 大 20.32 歳であり、そのレンジはどちらも 18 歳から 26 歳であった。

### 2. 調査期間

R 大学は 1998 年の 11 月から 12 月、M 大学は 2002 年の 9 月に行った。

### 3. 質問紙の構成

性役割観測定のために伊藤 (1978) によって作成された MHF-scale を用いて質問紙を作成した。scale は 30 項目からなり、Masculinity、Humanity、Femininity に各 10 項目が配されている。すべての項目に通目を通してもらった後、「あなた自身にとって: 個人的評価」、「社会一般において: 社会的評価」、「一般に男性にとって: 男性役割期待の認知」、「一般に女性にとって: 女性役割期待の認知」という 4 つの評価次元について独立に重要だと思われるものを 6 つずつ選択させた。また、年齢や学部を尋ねるフェイスシートを設けた。

4. 実施方法

談話室や食堂にいる学生に調査協力を依頼し、記入漏れのないよう注意して、その場で回答してもらった。対象者には質問紙を実施する直前に調査者が口頭で、質問紙は統計的に処理されるのでプライバシーは完全に保護されることを伝えた。回答中は調査者は対象者のそばを離れ、回答に影響しないよう配慮した。

III. 結果と考察

1. 性役割特性語の認知

1-1. 数理化理論Ⅲ類による分析

本研究で用いられた性役割特性語が大学生男女にどのように認知されているのかを明らかにするため、MHF-scaleの30項目に対し、対象者が行ったすべての評定を用いて、数理化理論Ⅲ類による分析を行った。第2軸までを抽出し、+方向、-方向にカテゴリーウェイトが高かった項目を軸ごとにまとめたものがTable 1である。

第1軸において+方向に大きなカテゴリーウェイトを示したものはすべてFeminity、-方向のものはすべてMasculinityの項目であることから、第1軸はFeminity-Masculinityの次元であると解釈できる。

第2軸においては+方向にMasculinityとFem-

inityの項目、-方向にHumanityの項目が配されていることから、性的なものと非性的なものとを弁別する次元であると解釈される。女子青年の性役割意識の構造の基本次元を調べ、〈男性的-女性的価値〉の次元と、それとは様相を異にする〈両価的因子内在〉の次元が存在するとした、伊藤(1981)の結果は現在においても支持されたと考えてよいであろう。

また、2つの軸に対するケース得点を算出し、大学と性の組み合わせによる4グループごとにその平均値を算出した(Table 2)。

各軸においてグループ間の差をみるために分散分析を行ったところ、第1軸には有意差がみられなかった。第2軸には0.1%水準で有意差がみられたため、下位検定を行った。その結果、R大学男子と女子の間で0.1%水準、R大学男子とM大学女子の間で5%水準、R大学女子とM大学男子の間で0.1%水準において有意差がみられた。

Table 2 ケース得点の平均値

対象者	第 1 軸		第 2 軸	
	平均値	S.D.	平均値	S.D.
R大男子	0.035	0.35	0.035	0.23
R大女子	-0.084	0.31	-0.037	0.24
M大男子	-0.074	0.34	0.018	0.21
M大女子	0.022	0.32	-0.028	0.23

Table 1 各軸において高いウエイトを示した項目

	第 1 軸		第 2 軸	
	項 目	カテゴリーウェイト	項 目	カテゴリーウェイト
+方向	色気のある	5.2162	静かな	5.6267
	かわいい	5.1837	従順な	4.9624
	静かな	4.4168	たくましい	4.4995
	繊細な	4.3107	頼りがいのある	3.3881
	優雅な	4.2010	色気のある	3.0219
	おしゃれな	4.1350	指導力のある	2.9221
	愛嬌のある	3.4579	冒険心に富んだ	2.8321
	従順な	3.1281	大胆な	2.5777
-方向	献身的な	2.7243	優雅な	2.5467
	たくましい	-1.1875	暖かい	-1.1728
	忍耐強い	-1.1913	明るい	-1.1815
	自己主張のできる	-1.2464	信念を持った	-1.3148
	冒険心に富んだ	-1.2891	誠実な	-1.4967
	信念を持った	-1.3029	視野の広い	-1.5829
	意志の強い	-1.5110	自己主張のできる	-1.7502
	行動力のある	-1.7127	健康な	-1.8778
	頼りがいのある	-1.8071	心の広い	-1.9840
	決断力のある	-1.8284	自分の生き方のある	-2.8999
指導力のある	-2.3250	率直な	-3.0719	

第2軸上の4グループの関係は+方向から-方向に順にR大学男子、M大学男子、M大学女子、R大学女子と並んでいると考えられる。よってR大学男子が最もジェンダーにとらわれており、R大女子が最もジェンダーにとらわれていないと考えられる。やはりこれまでの研究で明らかにされてきたように、男子よりも女子の方がリベラルな性役割態度を持っていることが読みとれる。

では、この2つの次元の中でそれぞれの特性語はどのような位置づけになっているのであろうか。これを明らかにするために第1軸を横軸に、第2軸を縦軸にとり、各カテゴリーのウエイトに基づいて各特性語をプロットしたのがFig. 1である。

Fig. 1において横軸は第1軸であるから、右端にあるものほど高いFeminityをもち、左端にあるものほど高いMasculinityをもつ。例えば「か

わいい」は右端にありFeminity、「指導力のある」は左端にありMasculinity、「頭の良い」は第2軸上に位置し、どちらにも偏りがないためHumanityと認知されていることがわかる。

また、縦軸は第2軸であるから、上に位置するものほど性的な度合いの強い言葉であり、下に位置するものほど非性的な言葉である。例えば「たくましい」、「静かな」のようにMasculinityやFeminityの中でも性度の高いものと、「信念を持った」のようにHumanityにより近いものがあることがわかる。

1-2. 評価次元による被選択特性語の分析

それぞれの特性語が各評価次元で選択された比率を男女別に示したものをTable 3 (個人的評価)、Table 4 (社会的評価)、Table 5 (男性役割期待)、

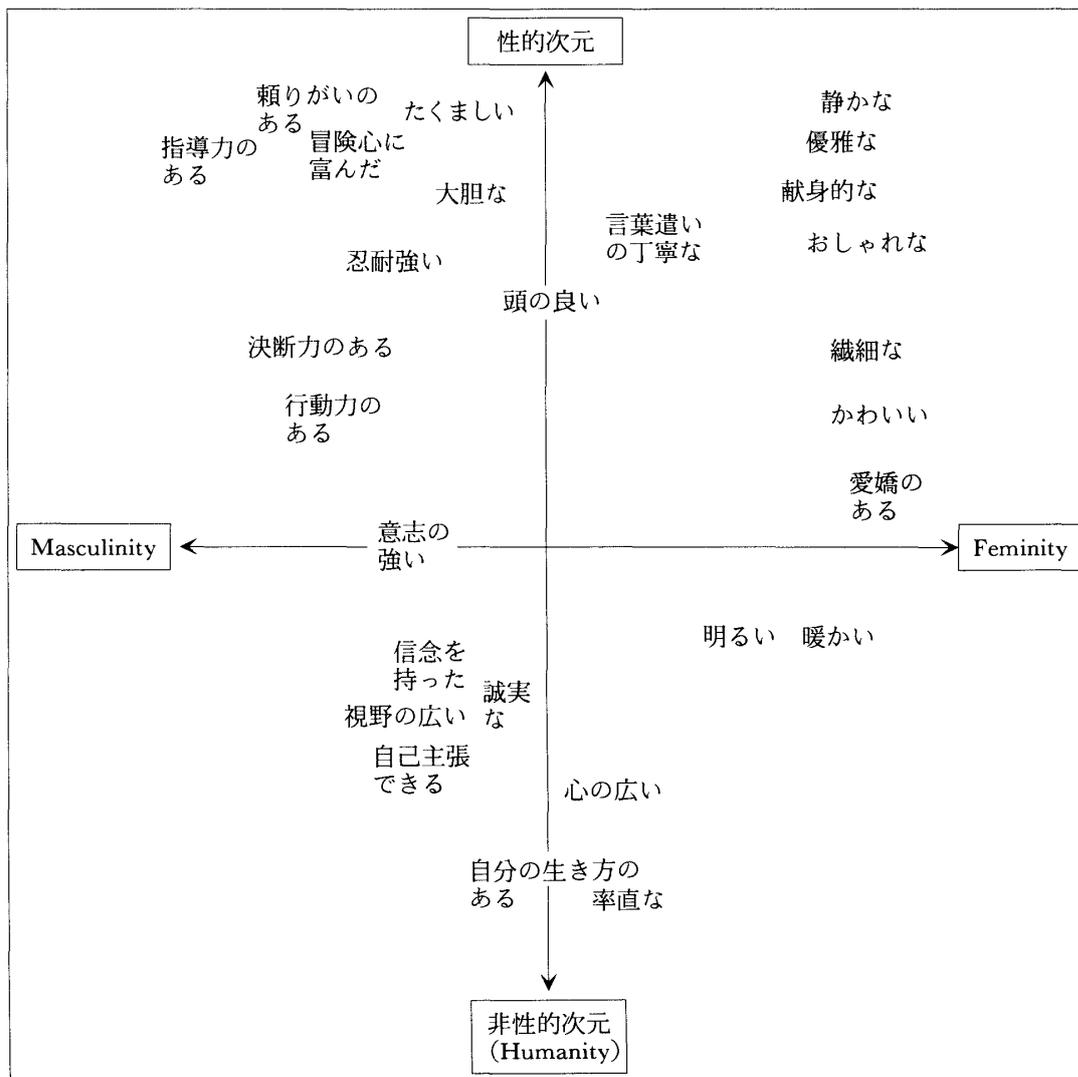


Fig. 1 各性役割特性語のプロット図

Table 3 各特性語の選択順位と選択率（個人的評価）

順位	男 子		女 子	
	特 性 語	選択率(%)	特 性 語	選択率(%)
1	決断力のある (M10)	57.07	自分の生き方のある (H9)	57.74
2	行動力のある (M7)	45.03	決断力のある (M10)	45.83
3	意志の強い (M9)	43.46	心の広い (H2)	45.83
4	自分の生き方のある (H9)	38.74	視野の広い (H10)	43.45
5	視野の広い (H10)	37.17	自己主張のできる (M8)	41.67
6	自己主張のできる (M8)	36.13	行動力のある (M7)	41.07
7	信念を持った (M5)	34.03	明るい (H4)	38.10
8	心の広い (H2)	32.46	意志の強い (M9)	32.74
9	明るい (H4)	26.70	健康な (H6)	26.79
10	健康な (H6)	26.18	暖かい (H5)	26.19
11	誠実な (H6)	25.65	信念を持った (M5)	24.40
12	指導力のある (M4)	22.51	誠実な (H6)	23.21
13	忍耐強い (H1)	22.51	忍耐強い (H1)	20.83
14	頼りがいのある (M6)	19.37	愛嬌のある (F5)	18.45
15	頭の良い (H3)	19.37	頭の良い (H3)	14.88
16	大胆な (M3)	14.14	冒険心に富んだ (M1)	14.29
17	率直な (H8)	12.57	率直な (H8)	13.10
18	冒険心に富んだ (M1)	12.04	言葉遣いの丁寧な (F26)	10.12
19	言葉遣いの丁寧な (F26)	12.04	おしゃれな (F10)	10.12
20	愛嬌のある (F5)	11.52	かわいい (F1)	8.33
21	暖かい (H5)	10.99	大胆な (M3)	7.14
22	たくましい (M2)	9.42	頼りがいのある (M6)	6.55
23	繊細な (F7)	6.81	たくましい (M2)	5.36
24	献身的な (F4)	5.76	色気のある (F3)	5.36
25	おしゃれな (F10)	5.24	繊細な (F7)	5.36
26	優雅な (F2)	4.19	優雅な (F2)	3.57
27	色気のある (F3)	4.19	献身的な (F4)	3.57
28	従順な (F8)	2.62	指導力のある (M4)	2.98
29	かわいい (F1)	1.57	従順な (F8)	1.79
30	静かな (F9)	1.57	静かな (F9)	1.79

Table 4 各特性語の選択順位と選択率（社会的評価）

順位	男 子		女 子	
	特 性 語	選択率(%)	特 性 語	選択率(%)
1	決断力のある (M10)	58.12	決断力のある (M10)	59.52
2	行動力のある (M7)	52.36	自己主張のできる (M8)	54.17
3	視野の広い (H10)	45.03	視野の広い (H10)	49.40
4	自己主張のできる (M8)	42.93	行動力のある (M7)	48.81
5	誠実な (H6)	38.22	誠実な (H6)	47.02
6	意志の強い (M9)	36.13	忍耐強い (H1)	34.52
7	指導力のある (M4)	34.55	信念を持った (M5)	30.95
8	信念を持った (M5)	33.51	言葉遣いの丁寧な (F26)	30.95
9	忍耐強い (H1)	33.51	指導力のある (M4)	27.98
10	言葉遣いの丁寧な (F26)	32.46	自分の生き方のある (H9)	27.98
11	心の広い (H2)	25.65	意志の強い (M9)	26.19
12	自分の生き方のある (H9)	22.51	心の広い (H2)	26.19
13	健康な (H6)	19.37	健康な (H6)	21.43
14	頭の良い (H3)	18.85	明るい (H4)	20.83
15	明るい (H4)	16.75	頼りがいのある (M6)	13.10
16	献身的な (F4)	14.14	頭の良い (H3)	12.50
17	頼りがいのある (M6)	11.52	愛嬌のある (F5)	11.90
18	暖かい (H5)	10.47	暖かい (H5)	9.52
19	率直な (H8)	9.95	率直な (H8)	8.93
20	冒険心に富んだ (M1)	8.90	従順な (F8)	8.93
21	従順な (F8)	6.81	冒険心に富んだ (M1)	7.74
22	たくましい (M2)	6.28	大胆な (M3)	5.95
23	大胆な (M3)	5.76	献身的な (F4)	5.36
24	愛嬌のある (F5)	5.76	たくましい (M2)	2.98
25	繊細な (F7)	2.62	かわいい (F1)	2.38
26	おしゃれな (F10)	2.09	繊細な (F7)	1.19
27	かわいい (F1)	1.57	おしゃれな (F10)	1.19
28	優雅な (F2)	1.57	優雅な (F2)	0.60
29	色気のある (F3)	1.57	色気のある (F3)	0.60
30	静かな (F9)	0.00	静かな (F9)	0.60

大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化

Table 5 各特性語の選択順位と選択率（男性役割期待）

順位	男 子		女 子	
	特 性 語	選択率(%)	特 性 語	選択率(%)
1	決断力のある (M10)	63.35	決断力のある (M10)	63.10
2	行動力のある (M7)	47.64	頼りがいのある (M6)	55.36
3	頼りがいのある (M6)	41.36	行動力のある (M7)	50.00
4	意志の強い (M9)	40.31	誠実な (H6)	48.21
5	心の広い (H2)	38.74	心の広い (H2)	39.88
6	誠実な (H6)	36.65	自分の生き方のある (H9)	36.31
7	信念を持った (M5)	34.55	たくましい (M2)	30.36
8	自己主張のできる (M8)	32.98	意志の強い (M9)	30.36
9	自分の生き方のある (H9)	30.37	信念を持った (M5)	27.98
10	忍耐強い (H1)	26.70	視野の広い (H10)	27.38
11	指導力のある (M4)	26.18	暖かい (H5)	24.40
12	たくましい (M2)	25.65	冒険心に富んだ (M1)	22.02
13	視野の広い (H10)	23.04	忍耐強い (H1)	21.43
14	冒険心に富んだ (M1)	20.94	健康な (H6)	20.24
15	明るい (H4)	16.75	指導力のある (M4)	19.64
16	暖かい (H5)	16.23	自己主張のできる (M8)	19.64
17	健康な (H6)	15.18	明るい (H4)	17.26
18	頭の良い (H3)	14.66	頭の良い (H3)	13.69
19	大胆な (M3)	13.09	大胆な (M3)	7.74
20	率直な (H8)	6.28	おしゃれな (F10)	5.95
21	言葉遣いの丁寧な (F26)	5.76	率直な (H8)	4.17
22	繊細な (F7)	5.24	かわいい (F1)	2.98
23	色気のある (F3)	3.66	愛嬌のある (F5)	2.98
24	献身的な (F4)	3.66	色気のある (F3)	1.79
25	優雅な (F2)	3.14	献身的な (F4)	1.79
26	静かな (F9)	3.14	言葉遣いの丁寧な (F26)	1.79
27	愛嬌のある (F5)	2.62	優雅な (F2)	1.19
28	おしゃれな (F10)	2.09	繊細な (F7)	1.19
29	従順な (F8)	0.52	従順な (F8)	0.60
30	かわいい (F1)	0.00	静かな (F9)	0.60

Table 6 各特性語の選択順位と選択率（女性役割期待）

順位	男 子		女 子	
	特 性 語	選択率(%)	特 性 語	選択率(%)
1	かわいい (F1)	52.88	明るい (H4)	50.60
2	明るい (H4)	52.36	自分の生き方のある (H9)	47.02
3	暖かい (H5)	49.74	愛嬌のある (F5)	45.83
4	愛嬌のある (F5)	39.79	暖かい (H5)	45.14
5	繊細な (F7)	35.60	かわいい (F1)	37.50
6	色気のある (F3)	35.08	心の広い (H2)	36.90
7	心の広い (H2)	29.84	自己主張のできる (M8)	29.17
8	自分の生き方のある (H9)	26.70	視野の広い (H10)	26.19
9	誠実な (H6)	24.08	行動力のある (M7)	22.62
10	健康な (H6)	23.04	意志の強い (M9)	22.62
11	自己主張のできる (M8)	19.90	健康な (H6)	22.62
12	おしゃれな (F10)	19.37	繊細な (F7)	21.43
13	率直な (H8)	18.85	誠実な (H6)	19.05
14	頭の良い (H3)	18.32	おしゃれな (F10)	17.86
15	信念を持った (M5)	16.75	決断力のある (M10)	16.67
16	献身的な (F4)	16.23	優雅な (F2)	16.67
17	言葉遣いの丁寧な (F26)	15.71	色気のある (F3)	16.67
18	決断力のある (M10)	14.66	言葉遣いの丁寧な (F26)	16.07
19	視野の広い (H10)	13.09	信念を持った (M5)	14.88
20	行動力のある (M7)	12.57	率直な (H8)	12.50
21	意志の強い (M9)	10.99	献身的な (F4)	12.50
22	優雅な (F2)	10.47	忍耐強い (H1)	10.71
23	静かな (F9)	8.90	頭の良い (H3)	10.12
24	大胆な (M3)	7.33	冒険心に富んだ (M1)	7.74
25	忍耐強い (H1)	6.81	従順な (F8)	5.95
26	従順な (F8)	6.81	たくましい (M2)	4.76
27	たくましい (M2)	4.71	静かな (F9)	3.57
28	頼りがいのある (M6)	4.19	大胆な (M3)	2.98
29	冒険心に富んだ (M1)	2.62	頼りがいのある (M6)	2.38
30	指導力のある (M4)	2.62	指導力のある (M4)	1.19

Table 7 被選択率に性差があった特性語

特性語	差の方向	有意確率
〈自己評価〉		
大胆な	男子>女子	p<.05
指導力のある	男子>女子	p<.01
信念のある	男子>女子	p<.05
頼りがいのある	男子>女子	p<.01
意志の強い	男子>女子	p<.05
決断力のある	男子>女子	p<.05
心の広い	男子<女子	p<.05
明るい	男子<女子	p<.05
暖かい	男子<女子	p<.01
自分の生き方のある	男子<女子	p<.01
かわいい	男子<女子	p<.01
〈社会的評価〉		
自己主張できる	男子<女子	p<.05
意志の強い	男子>女子	p<.05
献身的な	男子>女子	p<.01
愛嬌のある	男子<女子	p<.05
〈男性役割期待〉		
頼りがいのある	男子<女子	p<.01
自己主張できる	男子>女子	p<.01
誠実な	男子<女子	p<.05
かわいい	男子<女子	p<.05
繊細な	男子>女子	p<.05
〈女性役割期待〉		
冒険心に富んだ	男子<女子	p<.05
行動力のある	男子<女子	p<.05
自己主張できる	男子<女子	p<.05
意志の強い	男子<女子	p<.01
頭の良い	男子>女子	p<.05
自分の生き方のある	男子<女子	p<.01
視野の広い	男子<女子	p<.01
かわいい	男子>女子	p<.01
色気のある	男子>女子	p<.01
繊細な	男子>女子	p<.01
静かな	男子>女子	p<.05

Table 6 (女性役割期待)にまとめた。対象者の性によって違いがあるかをみるために全ての特性語について性による比率の差の検定を行った。その結果、統計的に有意な差がみられたのは Table 7 にあげる特性語であった。これらの図表をもとに各評価次元ごとの特徴をみながら、特性語の位置付けについて検討を行う。

#### 【個人的評価】

個人的評価において有意な性差がみられたのは Masculinity 6 項目、Humanity 4 項目、Feminity 1 項目の計 11 項目であった。男女が自分にとっ

て重要だと思う項目のどちらも上位 10 位は Masculinity と Humanity が占め、Feminity がはじめて登場するのは女子でも 14 番目、男子においては 19 番目である。これまで行われてきた研究はいずれも男女とも Masculinity を Feminity より高く評価するという男性の「優位性」を示し、Feminity には極端に低い価値しか与えられていないことを表していたが、このことは本研究においても確認された。

性差がみられた 11 項目のうち、Masculinity にあたる項目はいずれも男子が女子よりも高く評価しており、Humanity と Feminity は女子の方が男子よりも高く評価しているというようにはっきりと分かれる結果となった。このことは「男性は男性役割を積極的に受容しているのに対し、女性は女性役割を否定的にしか受容し得ず、それに代わるものとして Humanity が位置付けられている」という伊藤 (1978) の結果と合致する。現代の大学生女子においてもやはり個人の期待と周囲から求められる女性役割との間で葛藤に陥っていることが予想される。

特性語の内容をみると男女とも上位 10 位にあるものはほとんど同じであり、性別にかかわらず決断力や行動力、自分の生き方をもち、一人の個人として生きていこうとする姿勢が見受けられる。

#### 【社会的評価】

一般に社会において重要とされる特性で最も多く選択されたのは「決断力のある」で、男女に共通していた。個人的評価と同じく、上位 10 位のはほとんどを Masculinity と Humanity が占めているが、Feminity である「言葉遣いの丁寧な」が男子 10 位、女子では 8 位に選択されている。Fig.1 においても他の Feminity にあたる項目が右側に固まっているのに比べて、この特性語は随分と第 2 軸に近く、中性的であるといえる。このことより、MHF-scale が作成された 1978 年には Feminity であったこの特性語が、今日では Humanity であると認知されているのではないかと考えられる。

性差のみられた項目は Masculinity 2 項目、Feminity 2 項目の合計 4 項目だけであり、社会一般において重要とされている特性に対する男女の認知はかなり似通っているといえる。特徴的なのは Feminity の項目である「献身的な」を男子が女子よりも高く評価していることである。従来、

女性が男性役割を身に付けることよりも、男性が女性役割を身につけることは忌避されるべきものであるとされていたが、言葉の丁寧さや献身性など、一昔前までは明らかに女性的とされていた特性を男子が Humanity と判断することによって、それを自分の役割としてとりいれることが可能になる、そのような移行のプロセスを示しているように思われる。

上位に選択された特性語の内容をみると、個人的評価と同じく決断力と行動力があり、視野が広く、自己主張ができるといった特性が社会一般で求められていると認知しているようである。

#### 【男性役割期待】

一般に男性役割期待にとって重要な特性の認知においても、個人的評価、社会的評価と同じく、上位はほとんど Masculinity と Humanity で占められている。男子の評価をみると Femenity の項目は全て下位 10 位に追いやられており、女子の認知もほとんど同じである。男女とも社会的評価において「言葉遣いの丁寧な」や「献身的な」といった Femenity にあたる特性語を高く評価していたにもかかわらず、男性役割としてはいずれも非常に低く位置付けている。社会一般で期待される特性の認知は変化したが、男性に対する期待はほとんど変化がなく、相変わらず Masculinity、ついで Humanity を求めるという結果になっている。このことから、男性も以前のように周囲から期待される男性役割を獲得していけば自動的に社会で重要とされる特性をも身につけることができるのではなく、両者の間にはそう大きくはないがギャップが生じ始めているといえるだろう。男性役割に Femenity は全くといっていいほど期待されていないが、ジェンダーフリーが進むにつれて、実生活の中ではこれまで異性役割とされてきた家事・育児に関することも求められるようになってきた。男性が男性役割から逸脱することに対する反感は女性の場合よりも強いため、今後は男性もいくらかの役割葛藤を生じさせる可能性が示唆される。

選択された特性語の内容をみると社会一般で求められる男性像とは決断力、行動力、頼りがいがあり、意志が強く誠実であると認知されている。これは個人的評価、社会的評価ともかなりの部分で合致し、また男性性とは作動性であるとする伊藤（1986）の結果とも一致する。

#### 【女性役割期待】

一般に女性にとって重要とされる特性の認知においては Femenity の項目が多く上位にみられ、これまでみてきた 3 つの評価次元とは選択されている特性語の順序が異なるのは一見して明らかである。従来どおり女性に対しては Femenity 以上に Humanity を求めているという結果が本研究でも支持された。しかし、女性は美・繊細という女性役割を受け入れることに消極的である（柏木、1972）とされてきたが、「美」の因子に含まれると思われる「愛嬌のある」は 45.83%、「かわいい」は 37.50%、そして「繊細な」は 21.43% の女子が女性役割として認めている。美・繊細さが女性役割であることを女性が積極的に受容し始めたといえるのではないだろうか。Fig. 1 においてもこれら 3 つの特性語は Masculinity か Femenity かの別でいえば明らかに Femenity であるが、他の特性語に比べて下の方、すなわち度が低く、より Humanity に近い次元に位置している。Femenity の中でも社会的に望ましい項目を女子が女性役割として受け入れるようになってきたのではないだろうか。

ところで、因子分析によって青年の性役割認知の構造を検討した柏木（1972）では、女性性の因子として「従順な、謙遜な、男性に依存、容貌の美しい、かわいい、気持ちこまやか」などの因子が得られたため、これを「美と従順の因子」と名づけた。その後、伊藤（1986）は同じく性役割特性語の意味構造を因子分析を用いて調べ、女性性に関しては「細やかな、繊細な、言葉遣いの丁寧な、おしゃれな、色気のある、かわいい」などの因子が得られたため、伝統的な狭義の女性性を「美・繊細さ」と名づけた。この時点ですでに女性性からは「従順さ」というファクターが抜け落ちていたが、今回もこの伊藤の結果を支持するように、「従順な」という因子の評価は男女ともに低かった。よって、今日では「従順さ」は女性の役割としてあまり期待されてはいないといえるだろう。

男性役割期待においては Masculinity、Humanity 対 Femenity というようにその構造がはっきりと分かれていたが、女性役割期待においては確かに Femenity と Humanity を高く、Masculinity を低く期待しているとはいえ、3 つの項目が入り混じっており、男性役割期待ほど固く異性役割が忌避されているわけではないことがわかる。特に女

子の評価をみると Masculinity である「自己主張のできる」「行動力のある」「意志の強い」が上位に位置付けられており、従来男性役割とされてきた特性を積極的に女性役割に取り入れている姿が見受けられる。

女性役割期待において被選択比率に性差がみられた特性語は全部で 11 あり、Masculinity 4 項目、Humanity 3 項目、Feminity 4 項目であった。Masculinity にあたる項目は全て女子が男子よりも女性役割として高く評価し、Feminity にあたる項目は全て男子が女子よりも高く評価した。このことから女子は男子よりもこれまで異性役割とされてきたものを積極的に取り入れて、社会的により望ましい女性役割を作り上げているが、男子はまだ従来どおり Humanity と Feminity を女性に多く求めているといえる。

選択された特性語をみてみると、社会一般で求められる女性像とは明るく、かわいく、暖かく、愛嬌があって心が広く、自分の生き方のある女性であるといえる。

### 1-3. 評価次元間の比較

これまで評価次元に沿って各性別特性語がどのように位置付けられているかについてみてきたが「言葉遣いの丁寧な」など、以前は Feminity とみなされていたものが現在では Humanity とみなされている可能性があることが示唆された。よって、30 項目の性別特性語それぞれについて、どのカテゴリーのものと認知されているかを検討するために社会的評価、男性役割期待、女性役割期待の 3 つの評価次元での選択度数の差の検定を行い、他の二つの項目に比べて有意に男性役割期待に選ばれることが多かった項目を M 項目、女

性役割期待よりは男性役割期待、社会的評価に多く選ばれ、あとの二つの評価においては差がなかったものを MH 項目、社会的評価に選ばれることが多かったものを H 項目、男性役割期待よりは社会的評価、女性役割期待に選ばれ、あとの二つの評価においては差がみられなかったものを HF 項目、女性役割期待に選ばれることが多かったものを F 項目、社会的評価よりは男性役割期待、女性役割期待に多く選ばれ、後の二つの評価においては差がなかったものを MF 項目として Table 8 にまとめた。なお、有意水準は 5% に設定した。

M 項目の 4 つはいずれも以前から Masculinity とされてきたものであり、他の 2 つの評価次元より有意に男性役割期待に選ばれていることから、この 4 項目は現在でも Masculinity とよべるものであるといえる。H 項目の 6 つには、以前は Masculinity であったものが 3 つ、Feminity であったものが 1 つ含まれている。これらの項目は他の評価次元よりも社会的評価に有意に多く選ばれたため、社会一般において重要な特性と認知されており、Humanity に含めるべき項目であると考えられる。これは、Fig. 1 においてもほぼ同様の結果がみられる。

F 項目には従来の Feminity のほかに「明るい」「暖かい」など Humanity と認知されていた項目が追加されている。これらは女性にとって一般に重要な特性であると認知されているため、女性役割に含めるべきであると考えられる。Fig. 1 においてもこれは明確に表れている。

また、M、H、F いずれの項目にも分類されない、その中間もしくは両方と認知されている可能性のあるものとして MH 項目、HF 項目、MF 項目が確認された。MF 項目は男女両性に期待され

Table 8 評価次元間の差の検定による各特性語の分類

項目	<MH 項目>	<H 項目>	<HF 項目>	<F 項目>	<MF 項目>
冒険心に富んだ	信念を持った	指導力のある	献身的な	明るい	心の広い
たくましい	行動力のある	自己主張できる	従順な	暖かい	自分の生き方のある
大胆な	意志の強い	忍耐強い		率直な	
頼りがいのある	決断力のある	誠実な		かわいい	
		視野の広い		優雅な	
		言葉遣いの丁寧な		色気のある	
				愛嬌のある	
				繊細な	
				静かな	
				おしゃれな	

るものという意味で従来どおり Humanity に含まれるものだと考えられる。MH 項目、HF 項目など男性性、女性性と Humanity との間をつなぐ項目が見出され、特に「従順さ」と「献身的な」の2つが女性役割にとどまらず、より Humanity に近いものであると認識されているのは特徴的である。

以上のように、性役割特性語の認知においては男性性、女性性を弁別する軸と、性的なものと非性的なものを弁別する軸がみられた。Humanity を最も高く、ついで Masculinity を高く位置付け、Feminity にはあまり価値を置いていないという男性の「優位性」はここでも確認された。また、これまで Masculinity や Feminity に位置付けられていたものが Humanity に移行するなど、男女の役割が近づき、女性役割は以前よりも社会的に望ましいものと捉えられるようになったために、女子もいくらか女性役割を自己の役割として受容できるようになってきたように思われる。反対に男性役割期待においては従来は少なかった社会的評価と男性役割期待とのズレが生じ始め、これまでのように男性役割期待を身につければ自動的に社会的に望ましい性質も身につくというわけにはいかなくなってきているようである。

## 2. 大学生の性役割態度

### 2-1. MHF 項目の再検討と評価次元間の関連性の検討

では、現代の大学生の性役割態度は以前と比べてどのように変化しているのだろうか。

まず、現代の大学生の役割認知を正確につかむために、さきほどの手続きによって得られた結果に従い、30 項目の役割特性語を M 項目、H 項目、F 項目に分類しなおしたものが Table 9 である。MH 項目、HF 項目の扱いについては新しく項目を設けるには検討も不十分であり、項目数も少ないため、従来どおりの項目に配することにした。再分類の結果、Masculinity 8 項目、Humanity 10 項目、Feminity 12 項目が得られた。

各評価次元において選択された項目の個数をもとに評価次元間の相関係数を算出し、Table 10 に示した。

個人的評価と社会的評価には男女とも高い相関が見られることから、社会の期待に添った形で自己を作り上げていこうとしている姿勢がうかがえる。社会的評価と男性役割期待では女子はかなり

Table 9 各特性語の M、H、F 項目への分類

〈M項目〉	〈H項目〉	〈F項目〉
冒険心に富んだ	指導力のある	明るい
たくましい	自己主張できる	暖かい
大胆な	忍耐強い	率直な
頼りがいのある	誠実な	かわいい
信念を持った	視野の広い	優雅な
行動力のある	心の広い	色気のある
意志の強い	自分の生き方のある	愛嬌のある
決断力のある	健康な	繊細な
	頭の良い	静かな
	言葉遣いの丁寧な	おしゃれな
		献身的な
		従順な

Table 10 評価次元間の相関係数

評価次元	Female	Male
個人的評価と社会的評価	r=0.73	r=0.88
個人的評価と男性役割期待	-	r=0.88
個人的評価と女性役割期待	r=0.63	-
社会的評価と男性役割期待	r=0.67	r=0.79
社会的評価と女性役割期待	r=0.17	r=-0.23
男性役割期待と女性役割期待	r=0.07	r=-0.27

の相関を、男子は高い相関を感じており、男性役割の評価に差がみられるが、伊藤 (1978) では女性  $r=0.885$ 、男性  $r=0.898$  の高い相関を感じていたことからすると、男女とも男性役割を以前のように、ほとんど社会的望ましさと一致したものであるとはとらえていないといえるだろう。社会的評価と女性役割期待には、女子ではほとんど相関がないが、男子では低い負の相関があり、弱くはあるけれども女性役割を社会的望ましさと相反するもの、もしくは独立したものととらえているようである。男子では男性役割と女性役割の間に低くはあるが負の相関がみられ、両者を対立的に捉えていることが予想されるが、女子の評価においては相関はみられない。

### 2-2. 大学生の性役割態度とその変化

M、H、F 項目の被選択度数の平均値を、各評価次元ごとに算出したものが Fig. 2～5 である。

各評価次元ごとに、分散分析を用いて性差と M、H、F 項目間の差の検定をそれぞれ行った。その結果、性差がみられたのは個人的評価の M 項目、F 項目、女性役割期待の H 項目、F 項目のみであった。全ての項目間に 1% 水準で有意差がみられた。

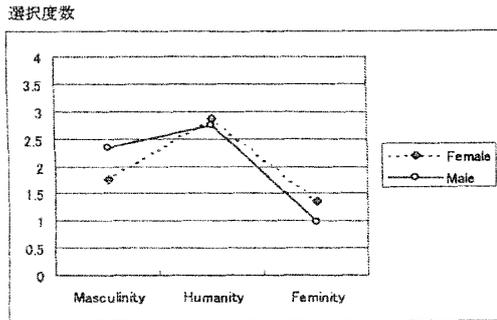


Fig. 2 個人的評価における各項目の被選択数の平均値

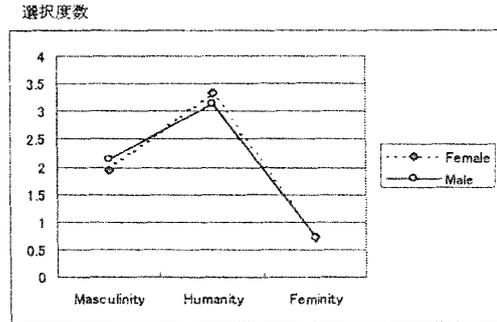


Fig. 3 社会的評価における各項目の被選択数の平均値

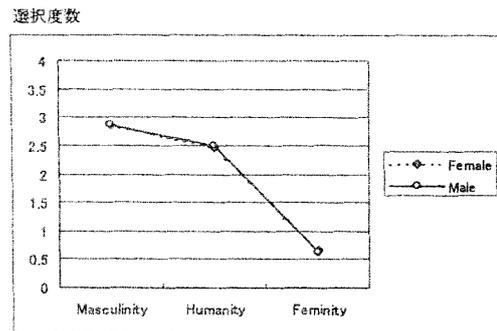


Fig. 4 男性役割期待における各項目の被選択数の平均値

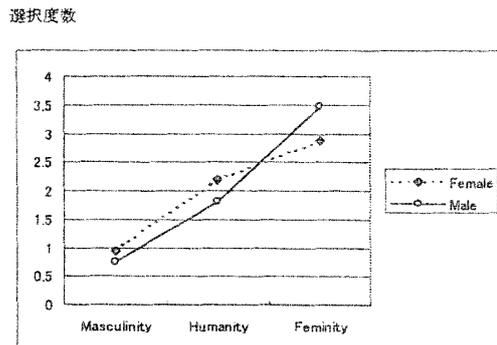


Fig. 5 女性役割期待における各項目の被選択数の平均値

個人的評価についてみると、男女ともに Humanity、Masculinity、Femininity の順に高く評価していることがわかる。この結果は「1. 性役割特性語の認知」でみた結果と一致する。また、伊藤(1978)においては個人的評価に性差はみられず、男女ともに Masculinity を高く、Femininity を極端に低く評価していたが、ここでは女子は男子よりも Masculinity を有意に低く評価し、Femininity を高く評価している。これまで女子においても Masculinity の「優位性」と、Femininity を極端に低く評価する傾向が指摘されてきたが、自己評価として Femininity を受け入れられるようになってきたのではないだろうか。

社会的評価についてみると評価に性差はなく、男女ともに Humanity、Masculinity、Femininity の順に高い評価を与えている。Masculinity に高い社会的価値を、Femininity には極端に低い価値を与えているのは従来通りである。

男性役割期待についてみると、性差はみられない。男性役割期待の認知は男女とも高い Masculinity、ついで Humanity を期待し、Femininity はほとんど期待していないという結果は以前と同様である。男子は個人的評価と男性役割期待の間に

高い相関を示している。男性役割期待と男子の個人的評価の間の一致度をみるためにグラフを Fig. 6 に示したが、ここでも大きな差異はみられない。ただし、男女の男性役割期待がかなり一致していることから、強固な性役割ステレオタイプがもたれていることが容易に想像されるため、そこから逸脱しづらいという役割葛藤が生じる可能性が示唆される。

女性役割期待についてみると男女とも Femininity を最も高く、ついで Humanity、Masculinity という順に期待をしているが、女子の方が男子より Humanity を高く、Femininity を低く評価しており、性差がみられる。よって男子の方が女子よりもステレオタイプのなとらえ方をしているといえる。男性役割の評価は男女で全くといっていいほど一致していたため、このような差は女性役割の認知の差から生じていると考えられる。つまり、男子は Femininity と Humanity は相反するものだと認知しているにもかかわらず、その両方を女性役割として求めるという矛盾した期待を持っているといえよう。

女子においては女性役割期待と個人的評価の間にはかなりの相関がみられる。女性役割期待と女

子の個人的評価の間の一貫性をみるためにグラフを Fig. 7 に示した。Femininity の評価で大きく食い違いが見られるため、女性役割期待の中身がより社会的に望ましい方向に変化したことによって個人的評価と重なる部分が増え、受け入れやすくなっては来ているものの、美・繊細さをあらわす伝統的な Femininity の項目に関しては受容するのが相変わらず難しく、役割葛藤が起きていると考えられる。

以上の分析により、大学生の性役割態度は 20 年前のものとは大きな変化はみられなかったといえよう。男性役割を獲得すると同時に自動的に社会的に望ましい特性をも身につけることが可能な男子とは異なり、女子は社会的望ましさを身につけたいと感じているにもかかわらず、周囲からそれとは異なった価値基準を持つことを期待され、その矛盾に葛藤を生じさせていることは従来どおりであった。

しかし、そのような中でも女子の個人的評価と女性役割期待においては以前よりも Femininity に対する評価が高まり、社会における女性の地位の向上を敏感に感じ取っている姿がうかがえる。東・

選択度数

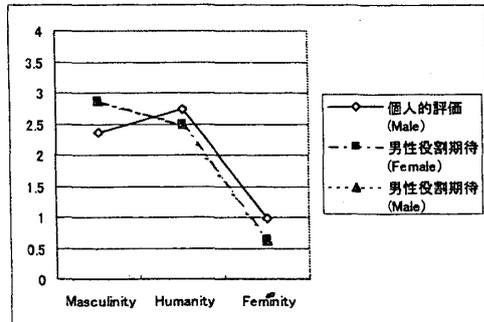


Fig. 6 男性役割期待と男子の個人的評価における各項目の被選択数の平均値

選択度数

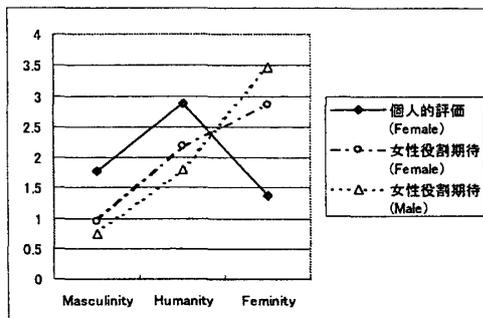


Fig. 7 女性役割期待と女子の個人的評価における各項目の被選択数の平均値

鈴木によると「日本では女性の平等主義的意識変化が男性に先行し、男性の変化はそれに伴う」(児島, 1985) とされているので、将来男子においても同じような変化を示し、女性の社会的望ましさをより高く評定するようになるのではないだろうか。

また、男性役割期待については強固なステレオタイプが持たれていることが予想されるため、家事や育児などこれまで Femininity とされてきた役割を求められるようになれば、男性の中でも役割葛藤や生きづらさが経験される可能性はすくなくあろう。

#### IV. 今後の課題

今回は質問紙を用いて大学生の性役割態度をみてきたが、ここでは実際に日常生活の中で性役割を演ずる側面は研究対象に含まれていなかった。このような性役割態度が実際に我々の生活のどのような行動に結びついているのか明らかにする必要があるだろう。

また、発達段階においては大学生が最も性役割態度が識別的になるとされてきたが、それは年齢が大きな変数であるのか、それとも環境なのか、同世代の有職青年との比較をすることによって、大学生の性役割態度を規定する要因が浮き彫りになるのではないだろうか。

さらに、最近ではジェンダーフリーの動きを受けて、男性の側からみたジェンダーに関する本の出版や学習会などが各地で催されている。男性に対しては女性より強固なステレオタイプが持たれ、異性役割を忌避する傾向が本研究でも確認されたが、家事や子育てなど、今まで異性役割とされてきた仕事を現実場面では多く求められるようになってきた。女性にとってジェンダーが持つ意味だけではなく、今後は男性を対象としたジェンダー研究も大いに期待される場所である。

#### 【引用文献】

- 東清和・小倉千加子 1984 性役割の心理 大日本図書
- 東清和・鈴木淳子 1991 性役割態度研究の展望 心理学研究, 62, (4), 270-276
- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical

- Psychology, 42, 155-162
- Bem, S. L. 1976 Probing the promise of androgyny. In A. G. Kaplan & J.P. Bean (Eds.), *Beyondsex-role stereotypes: Readings toward a Psychology of androgyny*. Boston: Little, Brown. Pp. 48-62
- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss. 1-3. Basic Book. (黒田実郎訳. 母子関係の理論. 第1-3巻, 岩崎学術出版)
- Broverman, I. K., Vogel, S. R., Broverman, D. M., Clarkson, F. E., & Rosenkrantz, P. S. 1972 Sex-role stereotypes: A current appraisal. *J. Soc. Issues*, 28, 59-78
- 遠藤久美・橋本宰 1998 性役割同一性が青年期の自己実現に及ぼす影響について 教育心理学研究, 46, 86-94
- 飯野晴美 1998 「男らしさ」「女らしさ」の自己認知と性役割観(2) - 大学生の自己認知の変化について - 明治学院論叢, 614, 55-72
- 稲垣知子 1969 青年期における女性の役割観の変容について 京大教育学部紀要, 12, 85-97
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11
- 伊藤裕子 1981 女子青年の性役割意識の構造 教育心理学研究, 29, 84-87
- 伊藤裕子 1986 性役割特性語の意味構造 - 性役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み - 教育心理学研究, 34, 168-174
- 伊藤裕子 2000 ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146-151
- 泉亜由美 2002 性役割観についての研究 - BSRIの妥当性の吟味と新たな性役割観の展望 - 日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科, 8, 53-58
- Jones, W. H., Chernovetz, M. E. O'C. & Hansson, R.O. 1978 The enigma of androgyny: Differential implications for males and females? *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46, 298-313
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 15, 193-202
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知II 教育心理学研究, 20, 48-59
- 柏木恵子・高橋恵子(編著) 1995 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房
- 三井宏隆 1989 心理的両性具有とは何か - Bem, S. L. の考え方とアプローチを中心に - 実験社会心理学研究, 28 (2), 163-169
- 中山まき子 1994 子どもをとりまく家族・社会・文化と「ジェンダー」との関わり 発達心理学研究, 5, 84-86
- 岡本裕子・松下美和子(編) 1994 女性のためのライフサイクル心理学 福村出版
- Suzuki, A. 1989 The scale of egalitarian sex role attitudes: scale development and comparison of American and Japanese women. Unpublished master's thesis, Harvard University, Cambridge, M.A.
- 鈴木淳子 1994 脱男性役割態度スケール (SARLM) の作成 心理学研究, 64, 451-459
- Taylor, M. C & Hall, J.A. 1982 Psychological androgyny: Theories, methods, and conclusions. *Psychological Bulletin*, 92, 347-366
- Thornton, A., Alwin, D. F., & Camburn, D. 1983 Causes and consequences of sex of sex role attitudes and attitudes change. *American Sociological Review*, 48, 211-227

#### 付 記

本論文は後藤淳子が1998年度に立命館大学文学部哲学科心理学専攻に卒業論文として提出したものを、データを追加して再分析・再考察したものです。調査の協力者となって下さった方々に、また当時、後藤の指導教官として多大なご教示・ご指導をいただいた藤健一先生(立命館大学文学部教授)に深く謝意を表します。